

Title	攻撃性に関する先行研究の概観
Author(s)	安立, 奈歩
Citation	京都大学大学院教育学研究科紀要 (2003), 49: 442-454
Issue Date	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/57473
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

攻撃性に関する先行研究の概観

安 立 奈 歩

A Review on Previous Theory about Aggression

ADACHI Naho

I. 問題提起と意義

攻撃性に関する研究は、心理臨床学をはじめ、他分野の心理学、人類学、生物学、動物行動学など、研究分野によって捉え方の幅は広い。また、心理学1つに絞ってみても、研究対象の違いや時代的背景の影響を受けて、様々に論じられてきた。目線を転じて、テレビニュースや人々のやりとりに耳をすませてみると、「攻撃的だ」「キレやすい」「衝動的だ」「イライラしやすい」といった言葉が、頻繁に飛び交っているのを耳にする。口語の場合、状況・文脈依存的に使用されるため、その意味するところは多義的なことが多いようだ。“攻撃性”“攻撃的である”という言葉から思い浮かべることは人によって異なるであろうし、おそらく十人十色の様々な連想が湧いてくるに違いない。使われ方が曖昧であることは問題点であるが、逆にいえば、各人が多義的なイメージを付与して事象を捉える土台になっているともいえる。だからこそ、概念を整理してみることが、心理学の発展にとり、意味のあることだと思われる。

神戸少年連続殺人事件、佐賀の17歳少年によるバスジャックにまつわる殺傷事件、愛知の17歳の少年による殺人事件などの少年犯罪が、世間を賑わしている。人間の闇の部分が目に見える形で現れてきている昨今、目に見えない筈の心の領域と、目に見える形で現れてくる現象との関連を、どのように捉えていったらよいのだろうか。このことについて考えるにあたって、攻撃性という切り口から、人間の心を問い直すことは、時代的にも意義あることと考えられる。

次に、筆者が身を置いている心理臨床の立場から「攻撃性」を検討するとき、どのような姿勢が必要かについて述べたい。外科的処置や薬によらず「お話による治療talking cure」を行なう心理療法において、概念は欠かせない道具である（河合，1998）。1つの概念を打ち立てることによってある現象が見えるようになり、病理の理解や治療関係の再考に生かすことができる。しかし、一方で、危険性も潜んでいる。なぜなら、「概念」を紋切り型に当てはめることで全てを理解して解決した気になってしまうことがあり、現象を明らかにするどころか、逆に、切り捨てたり覆い隠したりしてしまうことも生じうるからである。その意味では、「攻撃性」という概念を

援用することも、人間理解の上で有効であると同時に、理解を阻んでしまう危険性も孕んでいる（河合，1998）という点を忘れてはならないのである。

本論は、上記のことを踏まえて、「攻撃性とは何か」という問いに多面的に取り組むものである。次の3つの点から、従来の先行研究および理論の概観を行なうことを目的とする。

- i) 動物行動学の知見は、人間における攻撃性の研究に何をもたらしたか。
- ii) 従来の実証研究において、攻撃性の研究では、どのような現象がどのように扱われてきたか。
- iii) 従来の理論構築において、攻撃性という言葉にどのような意味が付与されてきたか。逆に、「攻撃性」という言葉が使用されておらず「攻撃性」概念を連想させる記述とはどんなものか。

なお、攻撃性の研究を始めるにあたっての筆者の出発点は、「人間が、内的なエネルギーに根ざしながら、外的な関係性の場においても生じてくるエネルギーを内界および外界にどのように方向づけていくのか」という問いにある。これは、人間存在を支えるエネルギーに繋がる問いである。したがって本論は、「攻撃性」概念を「心のエネルギー」との関連で問い直す試みでもある。

Ⅱ. 動物行動学の知見

動物の場合、何を以って攻撃性とされるのだろうか。人間の攻撃性との間に共通点はあるのだろうか。逆に、人間にだけ存在する攻撃的な要素とは、何であろうか。ここでは、動物行動学者 Lorenz, K. の知見を中心に概観し、人間の攻撃性との共通性と差異性を考える手がかりとする。

1. 攻撃性の果たす意味

(1) 種の保存としての攻撃性

動物行動学者 Lorenz, K. (1963) は、動物の攻撃性は、「同種の仲間に対する闘争（同種間闘争）」であり、種の維持と進化に欠くことのできない本能であると位置づけた。一見すると攻撃性を連想させる捕食行動は、生態系の平衡原理という巨視的な観点で攻撃性とは異なる、とされる。また、内的衝動の質的差異という点から、同種間闘争と区別されている。例えば、イヌが獲物に飛びかかっている時の表情には不機嫌や恐怖はなく、逆に、主人に挨拶したり、待ち焦がれていたことがやってきた時の緊張と喜びの表情と同じであるため、本来の意味での攻撃性ではない、と考えたのである。Lorenz, K. (1963) のいうところの「攻撃性」とは、不快感・恐怖感といった内的衝動を原動力として外界に働きかける一連の現象であり、個体よりもむしろ、種を維持するための本能である、と云えよう。

そもそも、同種の動物同士は何のために闘うのか。それは、次の4点に要約される。

- ① テリトリー；同種間の個体距離を保つことで過剰なライバル闘争を防ぎ、個体を適度に分散させることで地球資源を効率よく利用する。
- ② ライバル闘争；食料や配偶者をめぐって闘争し、強いオスが長生きして多くの子孫を残す。
- ③ 子孫の防衛；無力で依存的な子どもを保護する。
- ④ 順位制；集団の秩序を維持し、攻撃性を社会的に有用なものとして機能させる。

種内で行なわれる闘争とはいえ、その目的は、種全体の存続にあり、その意味で、必要不可欠

であり、健全な能力なのである。

(2) 破壊性を秘めた攻撃性

種を維持する筈の闘争が、時として破滅に至る可能性があり、Lorenz, K. (1963) は、セイランという鳥の例を挙げている。セイランは、翼の大きさをオス同士で競い合うという種内淘汰の道を選び、進化を遂げようとしたが、極端に翼が発達すれば捕食者に早く食べられてしまい、進化とは逆の方向へ追い込まれた、という。つまり、同種間の闘争が種外の環境と関係なしに単独で起こってしまうと、自己破滅に至る危険性が出てくるのである。種の内部だけに囚われすぎるのではなく、外界との関連でどう生き延びるかという対外的要素をも含めて作用してこそ、攻撃性は意味を持つということであろう。

(3) 抑制機能を備えた攻撃性

上記の知見より、動物の攻撃性は、自己保存的要素および自己破壊的要素という、二面性を持っていることが示唆される。しかし、さらに、攻撃本能を無害な方向へ導き、自己破壊的な結末を迎えるのを防ぐ「闘争の儀式化」という仕組みが備わっているという。「闘争の儀式化」とは、後天的に獲得した一連の行動様式が、進化の際、本来の機能を失って象徴的な形となったり、行動様式が模倣されることによって新しい本能を作り出したりする状態である。「儀式化」のやり方は、動物によって異なり、パリエーションも様々であるが、分類すると次のようなものがある。

- ① 闘争前の威嚇；威嚇姿勢・視線・外部から見える自律神経系緊張の誇示など。
- ② 転位活動；闘争と逃避の両価傾向の解決様式の発展。
- ③ 敗北・屈従の意思表示の定式化；威嚇と反対の姿勢の呈示、急所の呈示、オスによるメスの姿勢の呈示、子供の体位や行動、毛づくろい・挨拶。

2. 人間との共通性と差異性

Lorenz, K. (1963) の例示する、「闘争」や「儀式化」のエピソードを読んでいると、動物と同じ目的で他者に闘いを挑んだり、挨拶や仕草で和解の信号を送ったりする人間の生活場面が、いくつも連想されてくる。現象面での共通性が読み取れるという点で、人間にも、動物同様、生来的に攻撃性が備わり、また、自己破壊的要素を抑制する機能も備わっているといえよう。

しかし一方で、攻撃中止のサインが機能しないことがあるのは人間に限られるという。これは、人間のどのような特質に由来するのであろうか。さらにいえば、人間の攻撃性を規定するそもそもの要因としての、人間存在の独自性とは何であらうか。

動物の場合、同種間闘争も捕食行動も「本能」と一括することを前提に議論されている。また、内的衝動を考慮する場合でも、衝動そのものよりもむしろ眼に見える行動的側面を中心に、攻撃性を捉えている。それに対して人間の場合、攻撃性に対する見方は、次章で扱うように議論の分かれるところであり、一層複雑となる。その理由は、人間が「言語と記憶をもつ、自らの歴史性を担う精神的存在である（福島，1973）」ことに大きく依存すると思われる。さらにいえば、「動物では本能がそのまま先天的な適応様式となる〔註1〕」のに対し、「人間においては本能的欲求がいったん防衛されることによって初めて適応効果をあげるという反対の事実がある（土居，1988）」。Storr, A. (1968) によれば、「人間が精神的存在である」所以は、同一視の能力、投射の能力、過去を現在に持ち込む記憶能力、の3つであり、攻撃性との関連については、次のように

考えられている。

- ① 同一視の能力があり、他者の苦痛を感じるからこそ、サディズムが生まれる。
- ② 投射の能力があるからこそ、自己防衛のため他者を攻撃する事態が生じる。
- ③ 記憶能力があるからこそ妄想的な憎悪を他者に向ける。

人間の持つ無意識的な空想や衝動は、激しい憎しみや残忍さを生み出すことがある。あるいは、相手の気持ちを読み取っていながら、敢えて相手に苦痛を与える働きかけを行なうことがある。この点に、人間に特有の攻撃性があると考えられるのではないかと。憎悪や残忍さといった心の働きが、人間に特有の攻撃性と考えられる一方で、福島（1973）が指摘するように、攻撃性とは、人間性の特異な一局面というにとどまらず、人間が生きることの基本的姿勢を括弧に入れてはどうも考察することが不可能な、大きなテーマである。Ⅲ章、Ⅳ章では、冒頭に述べたii) およびiii) を目的とし、人間の「攻撃性」に関する省察を深めていくことにする。

Ⅲ. 心理学領域における攻撃性の実証研究

人間の攻撃性に関する見方には、次のように、内的衝動説、情動発散説、社会的機能説という3つの立場に分類して捉えることができる（大淵，1993）。それぞれの立場において、どのような事象がどのような方法論で扱われてきたのかを以下に概観する。

1. 内的衝動説

攻撃的言動を発動するエネルギーが個体内にあると仮定され、その衝動は内発的に自然に湧いてくると考える立場である。内的衝動そのものを実証的に研究することは不可能であるが、内的衝動の1つといえる敵意の研究や、内的衝動としての怒りの研究、あるいは、衝動の抑制機能に関する研究などがここで扱われている。

まず、他者の言動の背後に悪意を推測する敵意に関する研究には、質問紙作成の研究として、1尺度に敵意尺度を設ける試み（Buss, A.H. & Durkee, A., 1957）、これを受け敵意的攻撃性質問紙を作成する試み（秦，1990）がある。質問紙調査では、滝村（1991）が、質問紙調査から少年院の入居者には敵意の心性が高いことを認め、谷口（1994）は、青年期女子の自己破壊行動の欲求と対象（母親）攻撃行動のそれに注目し、質問紙調査より両者の間に優位な相関を見出している。実験研究では、意図が曖昧で受け取り手に委ねられる危害に対し、攻撃的な子どもの方が非攻撃的な子どもより攻撃的に反応するという差異を見出したDodge, K.A.（1980）の研究がある。

次に、内的衝動としての怒りに関しては、怒りが心身症と関連するという視点から、タイプAといわれる性格特徴〔註4〕と高血圧など身体症状の関連が数多くの研究から指摘されており（例えばMorrison, R.L., 1982）、直接発散される狭義の怒りではなく、方向性を考慮した怒りの内向性と外向性を測定する質問紙も開発されている（Spielberger, C.D., et.al., 1985）。

さらに、内的衝動の抑制機能に関する研究には、共感性が攻撃性に与える影響を検討したものがある〔註5〕。例えば、被害者の哀願を聞いた場合とそうでない場合では、前者において電気ショックの投与が抑制される結果となった研究（大淵・大野・向井，1993）や、逆に、投与する被害者によって事前に不快にさせられた場合は、そうでない場合より投与が強化される結果とな

った研究 (Baron, R.A., 1979) から、共感性は、相手に好意を抱いている場合は攻撃的態度を抑制する機能を持つが、相手に敵意を抱いている場合には攻撃的な態度をむしろ促進することが示唆された。

2. 情動発散説

攻撃性の動機づけは外的な動因にあり、外的なフラストレーションという不快な経験への反応として、攻撃的な動機が内部的に生じると考える立場である。Dollard, J. et al. による「欲求不満-攻撃仮説」[註6]を基盤とした研究には、欲求を妨害した際の反応を検討する実験が多く、例えば、赤ちゃんから哺乳瓶を早く取り上げるほど泣き出すまでの時間が短いことから、欲求不満の強さと妨害された欲求の強さが比例すると示唆された実験 (Sears, R.R. & Sears, P.S., 1939) や、行列に割り込むと順番の早い人がより攻撃的に反応したことから、欲求の強さは攻撃反応の強さを決めると示唆された実験 (Harris, M.B., 1974) などがある。これらの研究とは別に、日常の生活場面における各種の欲求不満を生起させる事態を設定した絵画を刺激とし、攻撃の向ける方向を検討する投影法としてP-Fスタディ (Rosenzweig, S.) が考案されている。

3. 社会的機能説

ある目的を達する手段として攻撃的言動を選択すると考える立場で、さらに2つの視点がある。

第1の視点は、事象と攻撃的言動との関係が経験によって形成され、有効な言動は類似の状況で喚起されやすくなると捉える社会的学習理論の考え方であり、例えば、ロールプレイで、教師による子への罰に賞賛を与えると教師による罰の選択が活性化した実験 (Geen, R.G. & Stonner, D., 1971) 暴力的な子どもの親は子どもの暴力を容認・賞賛していることを指摘した面接調査 (Bandura, A. & Walters, R.H., 1959) などの実証研究がある。また、他人の振る舞いとその結果を見ることによって新しい行動を学ぶ「モデリング」の視点を加えた研究では、Bandura, A., Ross, D. & Ross, S. (1963) の実験が有名で、大人が人形に暴力を振るう様子を見た子どもの攻撃的言動が高まることが示唆された。

第2の視点は、攻撃的言動を、葛藤場面の中で選択された認知処理過程の方略の1つと捉える認知系社会心理学の考え方である。ここでの攻撃的言動は、相手の意図を帰属させ、動機や性格を推測し、道徳的な評価を下し、将来の行動を予測するといった過程で積極的に選択される手段である。他者の敵意や怠慢あるいは自己中心的動機による言動に対しては強い怒りが喚起されることを実証した、人間に普遍的な心性に関する研究 (大淵, 1986) もあれば、性格の個人差に関する研究もあり、例えば、攻撃的言動を他者への強制力として攻撃的言動を用いやすい人の特徴として、専門性・地位・権威・個人的魅力の点での影響力の弱さ (Tedeschi, J.T., Gates, G.G., & Rivera, A.N., 1977) や自己評価の低さや自信のなさ (Feshbach, S., 1970) が指摘されている。

Ⅳ. 心理臨床における攻撃性の理論

1. 心のエネルギーという見方

心理臨床の領域において、攻撃性という概念は、それ自体、独立したものとして扱われてきた

訳ではない。むしろ、人間が生きる基盤となる心のエネルギーとは何か、という問いを出発点にして、心そのものを扱う中に見え隠れする形で扱われてきた。心のエネルギーが概念化されたのは、Freud,S.が「欲動Treib」と名づけたものが始まりであるが、これは、人間を行動へと駆り立てる力動的なプロセスに焦点づけた概念であり、エネルギーとしての実体を伴った概念として名づけられたのは「リビドーLibido」が最初であった。リビドーには性的性質があり、欲動Treibが、「対象との関連（リビドー備給の移動）、目標との関連（例えば昇華）、性的興奮の源泉との関連（性感帯の多様性）において様々に変容して現れる」際の、「根底にあるものとしてのエネルギー（J.Laplanche&J.-B.Pontalis, 1967）」のことである。配分と循環という経済論的観点（『欲動とその運命（1915）』）と、「エス・自我・超自我」という3つの審級の導入（『自我とエス（1923）』）により、リビドーは「エス」に貯蔵され、エスおよび自我・超自我・外界を量的に移動する、という心のエネルギー観がつくられた。

Freud,S.が一貫して二元論的立場に立ち、また、エネルギーに性的性質を付与したのに対し、Jung,C.G.は、エネルギー自体は変化するものでなく一元論的であるとし、その性質は中立的であると考えた（1928a）。エネルギーの経路は、生物学的、心理学的、精神的、道徳的な経路にわたる多様なものであり、流れが妨げられると別の方向へと流れを変え、強度も変わり、個人の全体性としてのエネルギーの均衡は保たれる。Jung,C.G.の考える心のエネルギーとは、意識と無意識が相補的に働いてバランスを保っている。人間には、エネルギーが内に向くか外に向くかの違いにより、外向的性格と内向的性格という2つの基本的態度があり、外向・内向の向性は、どんな人にもそれぞれのバランスで存在するとされる（河合, 1967）。

2. 無意識領域に存在する心のエネルギーの二面性

エスに由来するリビドーは、自我・超自我の形成以前であれば、秩序も組織もないために、本能的欲求の衝動そのものであるが、自我・超自我の形成以降のリビドーは、直接欲求を指向するばかりでなく、現実の事物を指向する知覚・思考・運動の中に分化する形をとるようになる（土居, 1988）。Freud,S.の考えでは、自我が心の主体を占め、コントロール可能な形でリビドーの配分と循環がなされれば、エスの欲求を、超自我ならびに現実の要請に従いながら、満足させていく。自我の防衛機制〔註2〕は、内界の無意識的な心のエネルギーを制御することを一次的機能とし、外界に適応する役割を二次的に果たすことができるのである。しかし、動員されたリビドーが現実の行動に活用することができないと、防衛機制は外界への適応に常に資するとは限らない。リビドーは、発達段階のある時期における本能的欲求の満足の仕方に固定され、時に適応を妨げることがある。欲求を満足させるやり方には様々な形がある〔註2〕が、それらは代理的な満足であり、結果として、神経症の症状を呈する。ただし、症状には、単に本人を苦悩させるものであるとは限らず、逆に、それ以上崩れてしまわないための守りともなっているのである。

一方、Jung,C.G.の考える心のエネルギーは、各人によって多種多様であるばかりでなく、既存の経路をとったエネルギーの流れは「元型」を形成している。元型は、あらゆる人の普遍的無意識に存在すると考えられている。元型そのものは決して意識化されることはなく（河合, 1967）、日常生活を営む限りでは、元型に触れる機会は皆無に等しいが、統合失調症者の心は、元型の持つ威力に晒され、圧倒されてしまっている状態であるという。ただし、意識レベルでの心のエネ

ルギーが低下した統合失調症者の心を、無意識レベルで空想力が活性化されており、創造的な力の起源でもあると肯定的に捉えるのが、Jung, C.G. (1928b) の視点である。

このように、無意識内で蠢く心のエネルギーは、破壊的で機能障害的な力ともなるが、単にそれだけに留まらない。無意識内にエネルギーが押し込まれること自体が守りであったり、創造性の起源にもなっているという側面が存在するのである。

3. Freud, S. と Jung, C.G. による攻撃性観

心のエネルギーというテーマは、人間の生きる基盤となる広義の攻撃性に関してであった。ここで、より狭義な攻撃性という問題に目を転じてみる。上記で概観してきたFreud, S. と Jung, C.G. は、どのような視点で攻撃性の問題を扱おうとしていたのだろうか。

(1) Freud, S. による攻撃性観とその後の発展

Freud, S. による心のエネルギー観は、欲動理論の変遷とともに大きな変化を遂げ、それに伴って、攻撃性の捉え方も移り変わっている。攻撃性の多義的な見方は、Freud, S. の考え方の変化の中に豊富に含まれている。そこで、欲動理論の変遷と、それぞれの視点がその後どのように発展したかを、福島 (1973)、神田橋 (1984)、高橋 (1985) を参考に、4つの観点から概観する。

欲動という言葉が初めて使われた『性欲論3篇 (1905)』で、攻撃性は、性欲動の属性とされ、性欲動と混合した衝動が攻撃性として扱われた。性対象に対して能動的に痛みを与えて征服しようとするサディズムと、性対象から受動的に痛みを負わされることに満足を感じるマゾヒズムがこれである。つまり、攻撃性は、それ自体で独立して存在するのではなく、性的な欲求と互いに組み合わせられて人間の中に具現する。この考え方は、レイプや家庭内暴力として現れる現象を扱う分野へと発展している。

『強迫神経症の一例に関する考察 (1909)』には、愛と憎しみが共存し、同一の人物に向けられる状態が記述され、攻撃性が愛との両価性において捉えられる萌芽となった。『悲哀とメランコリー (1917)』でも、当時、分裂病や抑鬱への関心を深めていたFreud, S. は、対象に向ける筈の憎しみが自己に向かう状態から攻撃性を記述した。鬱病者におけるリビドーは自己愛的な基盤のもとで行なわれているため、対象へのリビドー充当が困難に出会うと、対象充当が自己愛的同一視によって自己愛へ退行し、自らを対象として憎しみを向ける。ここに、対象に対する愛と破壊傾向とが同時に存在する両価性ambivalenceなる概念を提示している。攻撃性の内攻という考え方は、鬱病を検討する際の基盤として発展し続けている。

『欲動とその運命 (1915)』で、人間には、種保存のための「性欲動」と、個保存のための「自己保存欲動」という二重本能説を主張し、対象への憎しみが攻撃性として扱われている。ここでの憎しみとは、「自己保存と確保を求める自我の闘いに由来」し「常に自己を保存しようとする欲動と密接に関係して」おり、「性生活を〈手本〉にするものではない」という。つまり、攻撃性は、自己を守り維持する自我機能の一部と捉えられている。この考え方は、攻撃性自体を生きる建設的な能力として積極的な見方を与える方向に形を変えて発展し、Rank, B., Storr, A., Winnicott, D.W. へと引き継がれた。

第1次世界大戦を経てまとめられた『快樂原則の彼岸 (1920)』になると、生の欲動 (エロス) と死の欲動 (タナトス) の二元論が打ち立てられ、人間は生来にして2つの欲動を持っており、

そこから発動されるエネルギーの融合により、その後の生命活動が起こると考えるようになった。死の欲動とは、生の欲動に対立し、緊張の完全な除去に向かうような、生体を無機的狀態に導く欲動である。一方、生欲動とは、それ以前に区別されていた種々の欲動全体—生の欲動、性欲動、自己保存欲動—をまとめたものを意味するようになり、リビドーも、「狭義の性欲ばかりでなく、すべての性本能ないし生の本能のエネルギーを示す（土居，1988）」ものとなった。死の欲動が生の欲動から独立し、いわば攻撃性が独立した存在として捉えられるようになったといえる。しかし、死の欲動より発せられるエネルギーにはリビドーのように名前がつけられておらず、攻撃性なるものをエネルギーとして実体を持たせて考えていくことへの躊躇は、最後まで窺われた。死の欲動の考え方は対象関係論者Klein,M.へ引き継がれた。Klein,M.の考え方は、人間の無意識の幻想と破壊性を検討する基盤となっている。

(2) Jung,C.G.による攻撃性観とその後の発展

元型とは、人間の持つ本能の無意識的な模像で、心のエネルギー経路が、無規定でなくある特殊な構造をなして生じる原動力である（Jung,C.G., 1954）。Jung,C.G.は、「元型」の持っている破壊的な側面の中に、攻撃性をみている。一面的には善なるイメージであっても、同時に否定的側面を含みこむ。例えば、母親元型の派生物である太母great motherは、河合（1967）によれば、「地なる母の子宮の象徴であり、すべてのものを生み出す豊穡の地」としての生の神であると同時に、「すべてを呑みつくす死の国の入口」としての死の神でもあるという具合である。これは、個人的な母親像とは区別される。河合（1967）は、思春期の不登校男子の見た渦巻の夢に、「太母の象徴としての渦の中に足をとられて抜けがたくっているのではないか」と考察する一方で、この少年が熱中している「石器時代の壺を見る」「焼いて作ってみる」行為に、壺の「産みだし、あるいはすべてを呑み込む」太母の象徴を見る。少年が渦のイメージの凄まじさを話すうち、「甘やかされるのが嫌だ」と語ったところから治療的進展が見られた事例である。ここには、破壊性を持ったエネルギーは誰の心にも存在する自然な心性であり、一見否定的な側面であっても、内的な個性化を実現するためには必要な力である、という肯定的な視点が含まれている。また、攻撃性自体を元型と捉える見方（Hillman,J., 1983）もあり、昨今の少年事件に関して、山中（1996）は、殺人事件を早急に個人の問題に帰するのでなく、「通常なら普遍的無意識で生ずることが、きわめて清明な個人的無意識のもとに生じている」と述べ、普遍的な悪のテーマとして捉えている。しかし同時に、実際の殺人と内的な殺人との間にある筈の大きな隔たりをいとも簡単に飛び越えてしまう状況に驚きも述べ、守りの薄くなっている少年達の心の現状について問題提起している。

(3) 攻撃性の文化的問題

戦争を体験し大量の殺戮・破壊を目撃したFreud,S.と、人間の悪を普遍的無意識のテーマとして推し進めたJung,C.G.の視点は、文化的に攻撃性がどう扱われてきたかにも通底する。

Freud,S.は、アインシュタインの「人類を戦争の悲運から救う方法はあるか」という問いに答える形で展開された『戦争はなぜ（1933）』において、人々には破壊や殺戮を求める衝動が存在しており、戦争をその衝動の合法的な捌け口として利用すると述べた。

ユング派分析家Qualls-Corbett,N.（1988）は、攻撃性を、本来はエロスであった筈のものが「身体的虐待、相手かまわぬセックス」といった形で分離したものと捉える。官能的な愛の中に

こそ、エロスも神聖な性も含まれているにも拘わらず、性の暴力や援助交際が行なわれ、エロスが貶められてしまっているという。そして、エス(Freud,S.)を無視して霊性と性とが分離してしまっていることに警鐘を鳴らし、両者の統合が必要であると述べている。

先の動物行動学者Lorenz,K.(1963)は、犯罪が都市に多いことについて、集団による仲間意識が持てなくなって攻撃性の抑制機能が働かないこと、法律など多くの制約が課されており攻撃衝動の表現が不可能なことに、原因を求めている。また、臨死体験の問題を扱ったKübler-Ross,E.(1969)によれば、現代社会は、科学が発達すればするほどますます死の現実を恐れ、タブー視されるようになり、死に限らず、見ることを避けたいものは全て醜悪なものとして人目から隠されていると述べ、ネガティブな攻撃の衝動に置き所を与えない現代社会の現状を指摘している。

4. 関係性の観点からみた攻撃性観

人と人との関係は、各人の生きるエネルギーを発動しやすくもすれば、発動を阻みもする。また、心のエネルギーが育つそもそものプロセスにも、人と人との関係性が大きく介在する。対人関係におけるエネルギーの育ちおよび発動に課題を抱えて生きる存在としての人に、専門家はどのような存在として向き合っていけるのか。この問いに応えるべく、心理臨床学では、関係性の文脈で攻撃性を捉える見方が提唱されてきた。ここでは、関係性の中で発達する、あるいは関係性の中で阻まれる心のエネルギーについて、従来の理論を概観する。

(1) 心のエネルギーの発達と母子関係

乳幼児期において、養育者との間で体験される密な二者関係から、生きるために必要な心のエネルギーが育ってくる、という立場をとるのは、Bowlby,J.らである。

Bowlby,J.は、他者希求性を人間の一次的欲求と見なし、生理的欲求だけでなく、養育者との心理的な絆(「愛着attachment」)があつてこそ、心のエネルギーが育ってくると考えた。生後1年間を通して、子どもは、サッキング、しがみつきの後追い、微笑といった反応を、母親を焦点として統合する(1969)。こうして子どもは、情動のコントロールと対人関係における安心感を獲得するのである。攻撃性とは、「対象喪失経験における重要な派生物(1973)」とBowlby,J.は考える。全ての子どもは発達の過程で、束の間ではあれ親との別離を経験するが、その状況に対して激しい怒りを持つことが、親との再結合を求める重要な機能なのである。

Kohut,H.(1977)もまた、親による子への共感の重要さを強調し、攻撃性とは、自分に共感してくれる相手(「自己対象」)への無意識の期待が裏切られた時の激怒である、と捉えている。

Winnicott,D.W.は、「(独立した)赤ちゃんというものはいない。いるのは赤ちゃんとお母さんという対になった1組である(1965)」と述べ、子どもは母親への「絶対的依存期」から「相対的依存期」を経て、独立の方向へ向かう(1965)と捉える。子どもの未熟な自我は、母親に支えられる体験から、自我支持的な母親を取り入れることで、内的衝動を自分で抱える心のエネルギーを発達させていく。また、Winnicott,D.W.によれば、攻撃性の起源は、抱っこされた子どもが万能的な自分を満たしてくれることを求める感覚運動系の集合体としての自発的身振りにある。そして、この自発的身振りから、「自分でないnot-me」世界を発見し、現実的な自分の世界を確立することになるのである。Winnicott,D.W.の考える攻撃性とは、1人でいられる能力の礎石となる「存在の連続性」という感覚であり、本人にとってリアリティのある対象関係を築くための

基盤となる「生きている証」としての心のエネルギーなのである。

(2) 依存と自立の二面性からみた攻撃性観

Freud.S.の提示した「両価性」という概念は、攻撃的エネルギーの発動を関係性そのものへのメッセージとして理解しようとする視点と結びつき、一見すると破壊的な言動の背後に対象希求を読み取る治療的態度の必要性を論じる方向へと発展した。Storr,A. (1968) は、「人類が直面しなければならない最も困難な問題の1つは、他の人々と十分に親密な接触を保ちながら、一方同時に自律性を保つという問題である」と述べ、接近回避葛藤の内に攻撃的エネルギーの発動の起源があると考えた。これらの言及の中には、依存性と自立性という相反する2つの心の動きが、攻撃的エネルギーの発動と密接に関わっている、という見方が含まれている。

発達の観点においても、対人関係性と攻撃性の間には密接な連関がある。発達の一過程である思春期は、第2反抗期ともいわれ、自我の弱体化と内的衝動の高まりとが相俟って、攻撃性が内界にも外界にも向かう時期である。この時期には周囲の人々との関係性のあり方が重要となる(北村, 1986)が、特に乳幼児期における二者関係の躓きを乗り越えていない場合、内界から突き上げる攻撃的エネルギーを1人で抱えるだけの心のエネルギーが育っていない。そのため、問題行動や自己破壊行動という形で、攻撃性が発動されることが多いのである。

また、臨床場面においても、対人関係性の中において、様々な形で攻撃性が見られる。次に述べるように、見立ての違いによって、攻撃性の特徴は異なってくる。

境界例においては、「他者に対する怒り、軽蔑と憎悪、自己に向けられた様々な形の自己破壊性という、いずれも目標が定まらず、無構造的な攻撃性(西園, 1984)」が特徴である。自傷行為には、「取り入れられた内部対象あるいは現実対象との合体、融合(西園, 1984)」という動機があるといわれるが、柏木(1988)は、①抑うつ気分からの解放的要因、②自己陶酔的要因、③他者操作的要因を挙げており、これらを複合的な動機として行動化に至ると考えられる。治療的には、自己破壊行為を、関係性変容への働きかけとして理解しようとする姿勢が有効である、と李(1997)は述べる。

鬱病においては、攻撃性の内攻による自責、自罰、希死念慮があること、通常は攻撃性が抑圧され表面化しにくいこと(挟間・田中, 1986)、しかし、内心に激しい怒りがあること(西園, 1986)、長年にわたって我慢してきた恨みの感情があること(茂田, 1979)が特徴である。恨みとは、甘えたくても甘えられない場合に生じ、「単に敵意や憎悪の表現ではなく、その裏に甘えたい気持ちを宿している」と土居(1965)が述べるように、甘えと攻撃は表裏一体である。治療的には、人に云えず生きてきた、幼少期から現在に至るまでの傷つきと、それによる恨みを、共感的に聴く姿勢が有効である、と李(1997)は述べる。

統合失調症においては、「対象のみに攻撃性を認める」ことによって猜疑的となり被害者意識を高める形、あるいは自殺という形で顕在化する攻撃性が特徴である(坂口, 1984)。他者に対して感情や衝動を発動することに激しい不安があるため、妄想世界で安定を図ろうとするが、変化する現実には絶えず脅かされるので、感情や衝動が遊離して他者に投影されるのである。それでも変化する現実には耐えられない場合、自殺に至ることが多い。「対象を自分自身の一部として受け容れることができないか、さらに閉じこもって自分自身の一部でさえ自分自身であることを受け容れられないという心性(坂口, 1984)」が、変化を拒否する方向で自分を守り続けようとし

せるのである。治療的には、猜疑心が、善悪の共存する現実を取り入れる糸口になるという認識で、共感的に関わることが有効である、と坂口（1984）は述べる。

V. 結 語

本論では、攻撃性という概念を広義に人間の持つ心のエネルギーとして捉え、まず、そもそも人間とはいかなる存在かについて、Lorenz,K.の理論を概観し、動物と比較検討する題材を得た。第2に、実証研究で扱われてきた攻撃性について、3つの立場に分け、従来の研究を概観した。第3に、人間の持つ心のエネルギーにはどのような側面が含まれているのかについて、Freud,S.とJung,C.G.を中心に概観し、攻撃性に対する現代人の姿勢がもたらす文化的問題にも触れた。また、心のエネルギーがどのように育つのかについて、Bowlby,J., Winnicott,D.W., Kohut.H.の視点を呈示し、対人関係を営みながら人間が生きていく際に心のエネルギーはどのような形で機能しうるかについて、心理臨床において論じられている見方を簡潔にまとめた。以上を概観する中で、攻撃性とは必ずしも破壊的・機能障害的な力であるとは限らず、建設的・能動的な力となりうると捉えられていることを示した。

註

- 1) II章で述べたように、Lorenz,K.によれば、動物の本能にも破壊的要素は存在するため、その防衛機能も存在するが、それも一次的なもの、つまり本能と考えられる。
- 2) 防衛機制の問題は引き続きFreud,A.が扱っており、『自我と防衛（1936）』では、防衛機制として、抑圧、退行、反動形成、分離、取り消し、投射、取り込み、自分自身への方向転換、対立物への逆転、昇華を挙げている。
- 3) 性器期以前に、口唇期、肛門期、男根期、潜伏期という発達段階が想定され、それぞれの時期に特有の、性欲動（幼児性欲）の発動がなされると考えられた。
- 4) 「強い競争心と達成動機」「時間的余裕のなさ」「攻撃性」を大きな特徴とする。
- 5) ここで、共感性が生得的なものであるか、後天的に獲得したものであるかを、実証的に明らかにすることはできない。
- 6) この仮説には、「攻撃行動の生起には常に欲求不満の存在がある。欲求不満が存在すれば常に何らかの形の攻撃が生じる」という2つの命題がある。欲求不満とは、ある目標に向かって行動が開始され、目標達成のための努力が始まったにも拘わらず、それが途中で妨害された状態をいう。

VI. 文 献

- Bandura,A.,Ross,D.&Ross,S. (1963) : Imitation of film-mediated aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 601 - 607.
- Bandura,A.&Walters,R.H. (1959) : Adolescent aggression. New York : Springer-Verlag.
- Baron,R.A. (1979) : Effects of victim's pain cues,victim's race,and level of prior instigation upon physical aggression. *Journal of Applied Social Psychology*, 9, 103 - 114.
- Bowlby,J. (1969) (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳) (1976) : 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動. 岩崎学術出版社.
- Bowlby,J. (1973) (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳) (1977) : 母子関係の理論Ⅱ 分離不安. 岩崎学術出版社.
- Buss,A.H.,&Durkee,A. (1957) : An Inventory for Assessing Different Kinds Hostility. *Journal of Consulting*

- Psychology, 21 (4), 343 - 349.
- Dodge, K.A. (1980) : Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, 51, 162 - 170.
- 土居健郎 (1965) : 精神分析と精神病理. 医学書院.
- 土居健郎 (1988) : 精神分析. 講談社学術文庫.
- Feshbach, S. (1970) : Aggression. In P.H. Mussen (Eds.), *Carmichael's manual of child Psychology*. Vol.2. Wiley & Sons.
- Freud, A. (1936) (外林大作訳) (1958) : 自我と防衛. 誠信書房.
- Freud, S. (1905) : 性欲論 3 篇. 中山元訳 (1997) エロス論集. ちくま学芸文庫, 17 - 200.
- Freud, S. (1909) : 強迫神経症の一例に関する考察. 小此木啓吾訳 (1983) : フロイト著作集 9, 348 - 454.
- Freud, S. (1915) : 欲動とその運命. 中山元訳 (1996) 自我論集. ちくま学芸文庫, 11 - 47.
- Freud, S. (1917) : 悲哀とメランコリー. 井村恒郎・小此木啓吾他訳 (1970) : フロイト著作集 6, 人文書院, 137 - 149.
- Freud, S. (1920) : 快楽原則の彼岸. 中山元訳 (1996) 自我論集. ちくま学芸文庫, 115 - 200.
- Freud, S. (1923) : 自我とエス. 中山元訳 (1996) 自我論集. ちくま学芸文庫, 203 - 272.
- Freud, S. (1933) : 戦争はなぜ. 高橋義孝・生松敬三他訳 (1984) : フロイト著作集 11, 人文書院, 248 - 261.
- Geen, R.G. & Stonner, D. (1971) : The effects of aggressiveness habit strength upon behavior in the presence of aggression-related stimuli. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 149 - 153.
- Harris, M.B. (1974) : Mediators between frustration and aggression in a field experiment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 165 - 179.
- 秦一士 (1990) : 敵意的攻撃性インベントリーの作成. *心理学研究*, 61 (4), 227 - 234.
- Hillman, J. (1983) (河合俊雄訳) (1993) : 元型的心理学. 青土社.
- 福島章 (1973) : 攻撃性の精神力学. *精神医学* 15 (6), 4 - 30.
- J. Laplanche & J.-B. Pontalis (1967) (村上仁監訳) (1977) : 精神分析用語辞典. みすず書房.
- Jung, C.G. (1928a) : On Psychic Energy. C.W., Vol.8.
- Jung, C.G. (1928b) (松代洋一・渡辺学訳) (1995) : 自我と無意識. レグルス文庫.
- Jung, C.G. (1954) (林道義訳) (1982) : 元型論. 紀伊国屋書店.
- 神田橋條治 (1984) : Freud, S. における攻撃理論の展開. 中尾弘之編, 攻撃性の精神医学, 114 - 122.
- 柏木勉 (1988) : Wrist Cutting Syndrome のイメージ論的考察—23 症例の動機を構成する 3 要因の検討—. *精神神経学雑誌*, 90 (6), 469 - 496.
- 河合隼雄 (1967) : ユング心理学入門. 培風館.
- 河合俊雄 (1998) : 概念の心理療法. 日本評論社.
- 北村陽英 (1987) : 反抗と逸脱 親離れの挫折. 馬場謙一他編, 青年期の深層 日本人の深層分析 10. 有斐閣, 57 - 82.
- Kohut, H. (1977) (本城秀次・笠原嘉監訳) (1995) : 自己の修復. みすず書房.
- Kübler-Ross, E. (1969) (鈴木晶訳) (2001) : 死ぬ瞬間 死とその過程について. 中公文庫.
- 挟間秀文・加藤雄三 (1984) : 躁うつ病と攻撃性. 中尾弘之編, 攻撃性の精神医学. 医学書院, 180 - 191.
- Lorenz, K. (1963) (日高敏隆・久保和彦訳) (1985) : 攻撃 悪の自然誌. みすず書房.
- Morrison, R.L. (1982) : The role of social competence in essential hypertension. Unpublished doctoral dissertation, University of Pittsburgh.
- 西園昌久 (1984) : プリミティブな人格障害. 中尾弘之編, 攻撃性の精神医学. 医学書院, 207 - 219.
- 西園昌久 (1986) : 精神療法 躁うつ病の治療と予後. *精神科MOOK* 13. 金原出版, 189 - 198.
- 大淵憲一 (1986) : 質問紙による怒りの反応の研究 : 攻撃反応の要因分析を中心に. *実験社会心理学研究*, 25, 127 - 136.
- 大淵憲一 (1993) : 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学. サイエンス社.

- Oubuchi,K., Ohno.T.&Mukai,H. (1993) : Empathy and aggression : Effects of self-disclosure and fear appeal. *Journal of Social Psychology*, 132, 243 - 253.
- Qualls-Corbett,N. (1988) (菅野信夫・高石恭子訳) (1998) : 聖娼. 日本評論社.
- 李敏子 (1997) : 心理療法における言葉と身体. ミネルヴァ書房.
- 坂口信貴 (1984) : 精神分裂病と攻撃性—慢性期における猜疑心=被害者意識の治療的意義について. 中尾弘之編. 攻撃性の精神医学. 医学書院, 170 - 179.
- Sears,R.R.&Sears,P.S. (1939) : Minor studies of aggression : . Strength frustration-reaction as a function of strength of drive. Cited in Dollard,J.et.al.1939.
- 茂田優 (1979) : うつ病の攻撃性 原俊夫・鹿野達男編. 攻撃性—精神科医の立場から. 岩崎学術出版社, 77 - 113.
- Spielberger,C.D., Johnson,E.H., Russell,S.F., Crane,R.J., Jacobs,G.A.&Worden,T.J. (1985) : The experience and expression of anger : Construction and validation of anger expression scale. In M.A.Chesney&R.H.Rosenman (Eds.), *Anger and hostility in cardiovascular and behavioral disorders*. Washington : Hemisphere Publishing Corporation.
- Storr,A. (1968) (高橋哲郎訳) (1974) : 人間の攻撃心. 晶文社.
- 高橋哲郎 (1985) : 人間の攻撃性 神と悪魔の間にて. 馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕編. 攻撃性の深層 日本人の深層分析4. 有斐閣, 1 - 36.
- 滝村美保子 (1991) : パラノイド傾向と攻撃行動. 応用社会学研究 (東京国際大学社会学研究科), 1, 61 - 78.
- 谷口奈青理 (1994) : 青年期女子における自己破壊傾向と母子関係について. 京都大学教育学部紀要, 40, 277 - 288.
- Tedeschi,J.T.,Gates,G.G.,&Rivera,A.N. (1977) : Aggression and the use of coercive power. *Journal of Social Issues*, 33, 101 - 125.
- 山中康裕 (2000) : 最近の少年事件に対して, 専門家としてどう考えるか. 精神療法26 (4), 54 - 57.
- Winnicott,D.W. (1965) (牛島定信訳) (1977) : 情緒発達 of 精神分析理論. 岩崎学術出版社.
- Winnicott,D.W. (1964) (牛島定信監訳) (1984) : 子どもと家庭. 誠信書房.

(博士後期課程3回生, 心理臨床学講座)